

第2章 京都大学構内遺跡の概略

樋口隆康 泉拓良

1 京都大学構内の遺跡

京都大学は京都市左京区にある吉田キャンパスを中心に全国18道府県に附属施設があり、その敷地総面積は借地も含めると約49km²である。この敷地内には数多くの遺跡が存在し、古くから著名な遺跡も少なくない。大阪府高槻市にある農学部附属農場の安満遺跡〔島田ほか29, 小野山・都出73〕, 同市にある理学部附属阿武山地震観測所の阿武山古墓〔梅原36〕, 京都市北区にある農学部附属演習林上賀茂試験地の本山窯址〔宇佐56〕, 京都市左京区にある北部構内の北白川追分町(京大農学部)遺跡〔梅原23, 島田24〕などをあげることができる。そのほか、吉田キャンパスの各構内をはじめ、京都府向日市の農学部附属植物生殖質研究施設(中海道遺跡)〔向日市教委79〕, 京都府丹波町の農学部附属牧場(美月遺跡), 高槻市の農学部附属農場古曽部温室(古曽部遺跡), 和歌山県白浜町の理学部附属瀬戸臨海実験所(瀬戸遺跡)〔伊勢田66, 京大調査会77, 京大埋文研78a・80〕, 和歌山県串本町の農学部附属亜熱帯植物実験所(大森山丘陵遺跡C地点)でも遺跡を確認している。本章ではこれらの構内遺跡のうち、最も多く発掘調査をしている吉田キャンパスの遺跡について、その概略を述べる。

2 吉田キャンパスの遺跡

吉田キャンパスは面積約77万m²で、府道と市道によって6構内にわかれている(図版1)。北東から順に北部構内(京都市左京区北白川追分町・西町), 本部構内(吉田本町), 西部構内(吉田泉殿町), 教養部構内(吉田二本松町・近衛町), 医学部構内(吉田橋町), 病院構内(聖護院川原町)と呼ぶ。発掘調査をしていない西部構内を除く5構内で遺跡が発見され、60万m²の範囲に遺跡が存在すると推定している。縄文時代以降の遺跡が地域によって時代や性格を異にして分布しているため、遺跡の概要が把握しにくく、5構内ごとに遺跡をわけ、○○構内遺跡と表記していた。しかし、これは遺跡の状況を的確に表現しているとはいいがたく、昭和54年度以降はこの表記をやめ、発掘調査の成果を中心に文献史料や地質学の資料をあわせて遺跡のまとまりを検討している。その成果の一部は『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ一白河北殿北辺の調査一』として発表した。以下ではこの検討の一作業として、縄文・弥生時代の遺跡については地形復原と遺跡の立地から、平安時代以後の遺跡については軒瓦の分布密度から遺跡を分類し概観する。

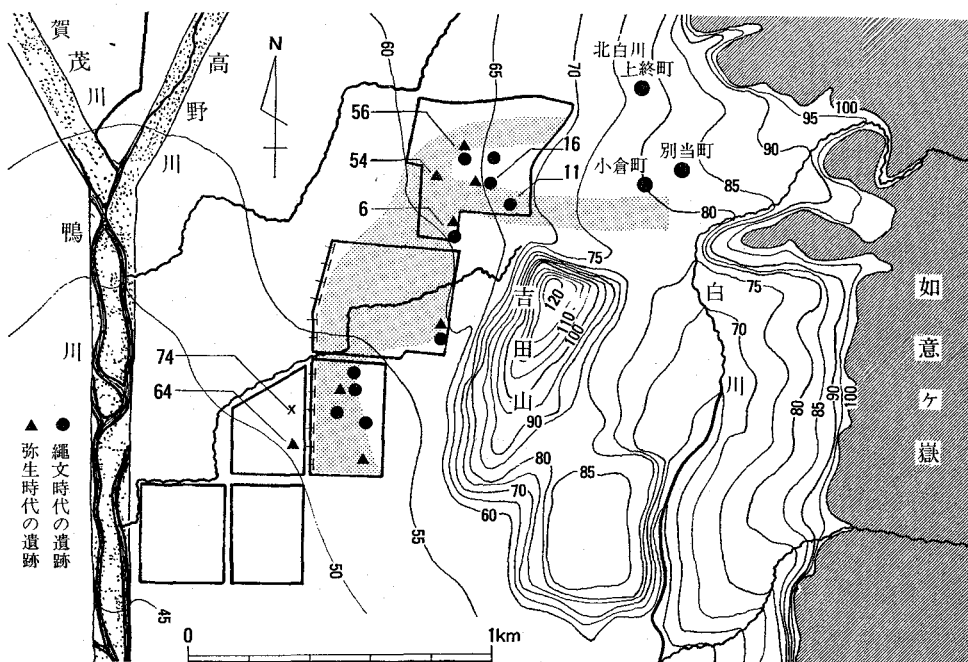


図1 北白川扇状地の縄文・弥生時代遺跡 縮尺 1/25,000

(明治25年仮製2万分1地形図から作成)

3 縄文・弥生時代の遺跡

縄文・弥生時代は地形が現在と異なっていた。現在白川は谷口から少し西流したのち方向を90°南折し、吉田山の東側を南へ流れている(図1)。しかし、かつては方向を変えずそのまま西流し、北白川扇状地上で数本に分流して、1本は北白川上終町遺跡の南で56地点の北を流れ、もう1本は11地点と6地点のあいだを流れていた〔泉78〕。そのほか、縄文時代の黄褐色砂層のみられない地域である本部構内中央あたりにも流路があったと推定している。図1に梨地で表わした範囲は、この白川が運んできた独特の色調の黄砂層を確認した地域である。54地点やその他の地点の発掘からみて、その堆積時期は弥生前期末～中期初頭であり〔京大埋文研79 p.18〕、淘汰が進んでいないことからみて、短期間に堆積したものと推測できる。

黄砂を確認していない範囲のうち、図1中央上の舌状地域と吉田山西麓の地域とは黄砂の堆積した低地より当時約1.5mほど高い微高地となっていた〔京大埋文研80 p.11〕。一方、図1西半の地域は黄砂の堆積した時期と同じころないしやや遅れた時期に高野川系河川の

氾濫原であった〔京大埋文研79 p. 6〕。現在でもこの地域は黄砂が堆積している地域より1~2m低く、その境には段が残っている(図1)。

このようにして復原した旧地形からみると、弥生後期の土器が出土した64地点を除く他のすべての地点は微高地とその南または西の下底部に位置していることがわかる。とくに扇央部の微高地とその南には、東から北白川別当町遺跡・同小倉町遺跡(縄文前期・中期末・後期)、京大植物園遺跡(図1-11, 縄文後期)、北白川追分町遺跡(図1-16, 縄文中期・晩期)、京大理学部遺跡(図1-54, 弥生中期)と並んでいる。11地点では縄文後期の甕棺・配石遺構、16地点では縄文晩期の集石土壌、54地点では弥生中期の方形周溝墓が発掘されており、扇央部が北白川扇状地上の遺跡群の中心であったと推測できる。

扇状地北部の微高地には縄文中期末の住居跡が発見された北白川上終町遺跡があり、扇状地南部で吉田山西麓にある教養部構内では縄文後期・晩期、弥生前期の包含層を検出している。このように北白川扇状地の微高地とその周辺には多くの遺跡が分布しているのである。ただし、各地点は時期が異なっている場合が多く、同一の集団もしくはその一部が扇状地上を移動した結果と考えられる。したがって、これらの遺跡は広い意味での1遺跡であり、北白川遺跡群として把握することが可能である。

黄砂の堆積をみない医学部構内74地点では、縄文晩期の土器を含む高野川系砂礫があり、その上に白川系の砂礫、さらに黄色シルトが堆積している(第3章 p. 14)。64地点ではこの黄色シルト層の上から弥生後期の土器を採集した〔京大埋文研80 p. 5〕。この地点は他の地点と異なった立地であり、北白川扇状地とその周辺では目下のところ唯一弥生後期の遺物が出土する地点であることから、北白川遺跡群に含めるか否かは検討する必要がある。

4 古墳時代～奈良時代の遺跡

縄文・弥生時代と続いてきた北白川扇状地とその周辺の遺跡は、弥生後期を最後に古墳時代後期まで途絶えてしまう。一方、この地の南や北ではこの時期遺跡が拡大・増加する傾向がある。扇状地の南約2kmには弥生後期から古墳時代中期まで続く岡崎御所内遺跡(円勝寺下層)があり〔円勝寺発掘調査団71〕、高野川と賀茂川の合流点から北へ約3kmのところには弥生後期～古墳時代前期の大集落である植物園北遺跡がある〔京文研80a〕。北白川扇状地での遺跡の断絶をこれらの遺跡の拡大と関係付けることも可能であろう。

古墳時代後期になるとふたたび北白川扇状地に遺跡が現われ、吉田キャンパスでも以後室町時代まで遺跡は継続する。古墳時代後期の遺構は縄文・弥生時代と同様に北白川扇状地扇央部に多く、北白川久保田町や下池田町では横穴式石室をもつ円墳、北部構内では土

坑を検出している。奈良前期には、扇状地東北部の山際に東西に並ぶ2寺(北白川廃寺)が建立され、平安中期までこの寺院は存続する。北部構内では周溝から完形の土師器甕が出土した奈良前期の方形周溝遺構〔中村73〕、本部構内では奈良後期の竪穴住居跡(第4章)を検出している。そのほか教養部構内や医学部構内でも古墳時代～奈良時代の遺物を採集した。一方、病院構内西半では高野川系砂礫の中から奈良時代の須恵器が出土し〔京大埋文研81 p. 11〕、当地が高野川の氾濫原であったことを示している。

古墳時代～奈良時代の遺構と遺物はあまり発見されていないため、遺跡の全体像は明らかでないが、北白川扇状地扇央部に遺跡が多い点は平安前期・中期の瓦の分布と一致する。

5 平安時代～室町時代の遺跡

平安時代に入ると、吉田キャンパスから出土する遺物の質が大きく変化する。瓦や二彩釉陶器、緑釉陶器など上層の特定階層と結びつく遺物が出土する。これは平安京造営による京近郊・葬地としての展開や、平安後期の鴨東・白河の開発と市街化にかかわっていたと推測できる〔宇野79, 岡田79〕。本節では調査で出土した軒瓦482点の分布密度の検討を中心に、市街化と遺跡のまとまりについて考察する(表2・3, 図2)。

平安前期 この時期の軒瓦は14点ですべて北部構内から出土した(表2)。とくに北部構内南部BD31区に多く、この地点から離れるほど少なくなる傾向がある(表3)。平安前期の遺物包含層は教養部構内と北部構内で検出したが、遺物の量は北部構内が多い。

平安中期 この時期の軒瓦は18点で、うち12点が前期と同様に北部構内南部に集中している(表3, 図2)。その他の遺物もこの地域に多いことから、瓦葺の建物が存在していた可能性が強く、その創建は平安前期に遡るであろう。教養部構内と医学部構内でも中期の軒瓦が出土するが、1～2点と少なく(表2)、また両構内では平安後期の古い段階の軒瓦が少ないことから、この時期両構内付近に瓦葺建物があったとは考えにくい。ただし医学部構内では二彩釉陶器壺や多数の須恵器小型長頸壺が出土することに注意を要する(第3章)。一方、病院構内では高野川系河川の護岸跡から平安中期の土器が出土し、高野川は奈良時代より西へ流路を変え、鴨東の整備が進んだことが判る〔京大埋文研81〕。

平安後期 この時期の軒瓦は291点と出土軒瓦総数の過半数を占め(表2)、5構内すべてで出土している。軒瓦の量・分布とも前期・中期と格段の差があり、一つの画期をなすと思われる(図2)。これを周辺の遺跡の状況からみると、六勝寺の造営をはじめとする白河街区の形成時期と合致し、地形の変遷からみると高野川の流路が西へ大きく変わることに関係する〔京大埋文研81〕。

表2 吉田キャンパス出土の軒瓦数

構内名	調査地域	調査番号	調査区	調査の種類	調査面積(m ²)	軒瓦点数					構内名	調査地域	調査番号	調査区	調査の種類	調査面積(m ²)	軒瓦点数					
						平安前期	平安中期	平安後期	鎌倉時代	室町時代							平安前期	平安中期	平安後期	鎌倉時代	室町時代	
北 部 構内	北 部	36	B J 33	試掘	8	0	0	0	0	0	養 老 部 構内	東 南 部	小 計			204	0	0	0	0	0	
		66	B H 37	試掘	46	0	0	0	0	0			14	A P 25	発掘	750	0	0	6	0	0	
		42	B I 30	試掘	20	0	0	0	0	0			48	A N 23	発掘	40	0	1	6	0	0	
	小 計			74	0	0	0	0	0	15			A N 24	立合	148	0	0	3	0	0		
										93			A M 22	立合	25	0	0	0	0	0		
	小 計			963	0	1	15	0	0	教養部構内合計					1167	0	1	15	0	0		
	東 部	8	B G 36	発掘	13	0	0	25	0	0		東 部	74	A P 19	発掘	2776	0	2	47	6	1	
		10	B G 33	発掘	40	0	0	3	0	0			83	A L 20	試掘	23	0	0	1	0	0	
		12	B E 33	発掘	800	2	1	9	0	0			小 計			2799	0	2	48	6	1	
		15	B E 33	発掘	900	3	0	26	1	8			西 部	41	A O 18	発掘	1200	0	0	71	136	0
		55	B G 32	発掘	100	0	0	0	0	0				58	A N 18	発掘	200	0	0	9	2	0
		11	B D 35	発掘	427	3	0	6	2	0				68	A L 18	試掘	12	0	0	0	0	0
		小 計			2280	8	1	69	3	8		85		A L 17	試掘	12	0	0	0	0	0	
										小 計				1424	0	0	80	138	0			
	北部構内合計				3854	14	15	78	5	8		医学部構内合計			4223	0	2	128	144	1		
	本 部 構内	東 部	71	A Z 30	試掘	25	0	0	0	0		0	病 院 構内	西 北 部	72	A K 18	試掘	46	0	0	0	0
90			A X 28	発掘	1120	0	0	18	1	0	86	A K 16			試掘	8	0	0	0	0	0	
70			A U 29	試掘	28	0	0	1	0	0	88	A J 17			試掘	115	0	0	0	0	0	
小 計			1173	0	0	19	1	0	53	A I 13	試掘	20			0	0	0	0	0			
西 部		57	A W 28	発掘	500	0	0	0	0	0	87	A G 14			試掘	34	0	0	0	0	0	
		75	A T 27	発掘	400	0	0	2	0	0	小 計				223	0	0	0	0	0		
		89	A T 27	発掘	115	0	0	0	0	0	28	A I 19		試掘	16	0	0	1	0	0		
部		小 計			1015	0	0	2	0	0	34	A H 17		発掘	200	0	0	2	0	0		
		本部構内合計				2188	0	0	21	1	0	19		A E 14	発掘	2200	0	0	36	0	0	
教 部		西 北 部	35	A S 23	試掘	10	0	0	0	0	0	全 構 内 合 計		小 計			3216	0	0	49	0	0
	48		A Q 23	発掘	40	0	0	0	0	0	病院構内合計					3439	0	0	49	0	0	
	73		A P 22	試掘	42	0	0	0	0	0	全構内合計					14871	14	18	291	150	9	
	84		A O 21	発掘	112	0	0	0	0	0												

表3 調査面積 100㎡あたりの軒瓦出土数(個数/100㎡)

構内名	地 域	調 査 面 積 ㎡	軒瓦分布密度 (個数/100㎡)					構内名	地 域	調 査 面 積 ㎡	軒瓦分布密度 (個数/100㎡)				
			平安 前期	平安 中期	平安 後期	鎌倉 時代	室町 時代				平安 前期	平安 中期	平安 後期	鎌倉 時代	室町 時代
北 部	北 部	74	—	—	—	—	—	教養部	西 北部	204	—	—	—	—	—
	北 東 部	2280	0.4	0.0	3.0	0.1	0.4		東 南部	963	—	0.1	1.6	—	—
	西 部	1150	0.1	0.2	0.6	0.2	—	医学部	東 部	2799	—	0.1	1.7	0.2	0.0
	南 部	350	1.4	3.4	0.6	—	—		西 部	1424	—	—	5.6	9.7	—
本部	東 部	1173	—	—	1.6	0.1	—	病院	西 北部	223	—	—	—	—	—
	西 部	1015	—	—	0.2	—	—		東 南部	3216	—	—	1.5	—	—
									全 構 内	14871	0.1	0.1	2.0	1.0	0.1

建物と関連する遺構・遺物としては、瓦溜が北部構内東部BG36区〔京大埋文研78b〕と、教養部構内東南部AN24区〔京大調査会77 p. 77〕で検出され、医学部構内AO18区・AP19区と教養部構内東南部AN23区〔京大埋文研79 p. 49〕で凝灰岩片が出土している。したがって、軒瓦も集中して出土する北部構内東部、教養部構内東南部、医学部構内西部に瓦葺建物があったと推定しうる。また、病院構内東南部では瓦の出土が南へ偏ることから、調査地の南方に瓦葺建物を想定している〔岡田81 p. 100〕。本部構内東部も軒瓦が他地域からの流れこみとは考えられず、付近に瓦葺建物を推定する必要がある(図2)。

平安後期の軒瓦を時期的に細分すると、中期から連続して軒瓦が出土するのは北部構内だけである。他の構内からは中央官衙系瓦屋第Ⅲ期(12世紀前葉)〔上原78a〕以後の軒瓦が出土する。この第Ⅲ期の軒瓦は白河北殿の北辺にあたる病院構内南端に多く、北部構内を除く他の構内では1～2点を数えるのみであるが、第Ⅳ期・第Ⅴ期の軒瓦はすべての構内で多数発見されている。このことから、北部構内には位置を若干変えてはいるが平安前期以後連続して瓦葺建物があったと考えられる。しかし他の構内では白河街区の中心地により近い病院構内の南に瓦葺建物がまず建立され、以後若干遅れて北の本部構内まで開発が及んだと考えられるであろう。

一方、この時期の軒瓦が出土していない地域がある。北部構内北部と教養部構内西北部と病院構内西北部である。教養部構内西北部では平安後期～室町時代の遺構・遺物が多く検出されていることからみて、瓦葺でない建物群があった可能性が強い(第5章 p. 39)。医学部構内南端と病院構内西北部とでは高野川系河川の蛇行部が検出されており、その周辺はあまり利用されない地域であったと思われる(第5章 p. 42)。北部構内北部は白川の

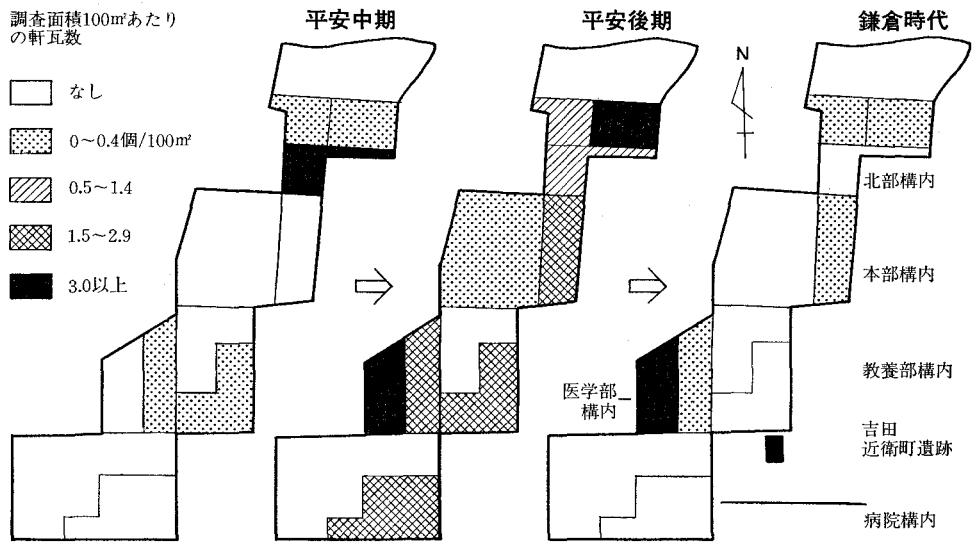


図2 軒瓦分布密度の時期的変化 縮尺 1/25,000

一支流と思われる河川の痕跡があり〔京大調査会77 p. 78〕，扇状地中央の微高地北斜面であるためあまり利用されなかったのであろう。この軒瓦が出土していない地域を念頭におくと，前述した各構内の瓦葺建物の存在がより鮮明になる(図2)。

鎌倉時代 鎌倉時代の軒瓦は150点と平安後期に次いで多いが，そのほとんどが医学部構内西部A O18区〔京大埋文研79〕から出土した(表2)。そのほかは，医学部構内東部，本部構内東部，北部構内東部・西部から小量出土した(表2)。この時期の軒瓦がまとまって出土した教養部構内南の吉田近衛町遺跡〔平良78〕を教養部構内東南部と一連の遺跡として加えると，病院構内東南部を除いて平安後期の軒瓦がまとまって出土した地域とすべて重なる。軒瓦以外の遺物は各構内とも平安後期と同じかやや増加する傾向があり，また，遺構も平安後期と連続するものも多く，平安後期の建物は鎌倉時代まで存続していたと考えられる。しかし，病院構内南方に推定した平安後期の建物は鎌倉前期のうちに廃絶した可能性が強い。

室町時代 軒瓦9点のみと急激に少なくなる。それも医学部構内東部の1点以外はすべて北部構内東部から出土した(表2)。教養部構内東南部と関係する吉田近衛町遺跡のSK01では室町前期(中世京都Ⅱ期中～新段階ごろ)の土器に伴って鎌倉時代の軒瓦40数点が出土している〔平良78〕。室町時代の軒瓦はなく，おそらく室町時代に入ってから建物が修復されることなく14世紀後半ごろに取壊されたのであろう。医学部構内西部や本部構内

西部の建物もこのころ廃絶した可能性が強い。軒瓦以外の遺物は室町初頭に本部構内東部・西部で減少するものの、その他の構内では増加する。しかし、14世紀後葉になると多くの構内で遺物は急に少なくなり、室町中期以後の遺物は各構内ともほとんど出土していない。室町前期ごろの軒瓦が比較的まとまって出土した北部構内東部では、16世紀ごろの一石五輪塔や石製卒塔婆が出土し、この時期に寺院が存在していた可能性もある。しかし、他の構内は14世紀後葉ないし15世紀以後は田畑と化したと思われる。

6 吉田キャンパス内の遺跡のまとめ

吉田キャンパス内の遺跡を時期別に別けて説明してきたが、最後に視点をかえてそれぞれの遺跡を形成した主体について考え、遺跡のまとめについて言及する。

縄文・弥生時代の遺跡はすでに述べたように、比叡山西麓に居住していたひとつの集団によって形成された遺跡であろう。古墳時代前期・中期にみられる遺跡の断絶は集団がかわった可能性を示す。古墳時代後期以後、北白川扇状地には一貫して遺跡があり、奈良前期から平安中期の北白川廃寺や平安前期から室町時代の北部構内の「寺院」からみて、扇状地上の遺跡の連続性が想定される。一方、北部構内以外の構内にみられる平安後期からはじまる瓦葺建物を伴う遺跡は、すべて14世紀のうちに収まってしまう。後者を白河街区の開発に伴って形成されたものであり、特定の階層たとえば受領層によるものと考えられるならば、北部構内の遺跡はより地域に根ざした在地勢力との係りで展開した遺跡と推測しうる。その意味において、古墳時代以後の遺跡は大きく2つに分けることができる。ただし、平安前・中期から遺跡が始まり以後独自に展開した可能性のある教養部構内西北部とその周辺をこのいずれかに含めるかは未解決である。白河街区に含まれると推定した地域は遺構の方位や盛衰時期の差から、病院構内東南部、医学部構内西部、教養部構内東南部、本部構内東部の4つに細分できる。前3者についてはそれぞれ文献史料から、白河北殿の北辺〔京大埋文研81〕、吉田氏(藤原北家勧修寺家流)の第宅と菩提所〔泉80〕、福勝院〔杉山62、川上77〕にそれぞれあてることが可能である。また、教養部構内西北部を吉田社旧社地にあてることができるならば、本部構内は平安中期の葬地〔川上77〕にあたり、北部構内の「寺院」は神楽岡吉田寺にあてることができる。しかし、直接的な証拠は目下のところなく、結論を下すためには資料の増加を必要とする。

個々の発掘調査について、遺構の詳細な検討、遺物の様式的・量的把握を行ない、文献史料を集成することによって、遺跡のより緻密な把握が可能である。本章はそのような作業のおおまかな位置付けとして吉田キャンパス内の遺跡の概略を記した。